対面・オンライン授業の創造的選択：

大学生にとって満足解の英語スピーキング授業とは？

日　南　桃　花
若　本　夏　美

Abstract

This study explores the appropriate conditions for speaking courses at tertiary-level education in Japan. In the past three years, students and teachers all over the world have experienced online courses, which has had a positive impact on the ICT skills of college instructors. This suggests that online classes can be a valuable teaching method. Thus, the goal of this study is to identify college students' recognition of face-to-face and online speaking courses and to uncover the appropriate mode of speaking classes. The participants of this study were 37 college junior students, who experienced both online and face-to-face speaking courses in the last three years. An originally developed questionnaire of 28 items with semantic differential scales and multiple choice/multiple answers was used. As a result of the analysis, the pros and cons of face-to-face and online courses are revealed.

1．はじめに

ひとが幸せであったことをあとから実感するように、時代の大きな潮目というものはその渦中にいる者には分かりにくい。中学・高校で学んできた日本史や世界史といった歴史にしてもその時代が過ぎ去って何十年も経ってからその評価がやっと定まってきたものだ。その意味では2019年に端を発した新型コロナウイルス感染症は、第一次世界大戦の末期、およそ100年前に世

界を震撼させたスペイン風邪と同様、この地球で暮らす約70億の人類の様々な活動に隕石の衝突と同様の大きな影響を与えたと後世の歴史家が評することになるのであろう。インターネットの影響の大きさを評し、Before Internet（以後、BI）と After Internet（以後、AI）のように時代が区分提唱がなされたように（伊藤、山中、2016）、今後、Before Covid-19（以後、BC19と表記）と After Covid-19（以後、AC19と表記）といった時代区分がなされるかもしれない。例えば、BC19においても遠隔授業をすることは不可能ではなかったもののとても容易とはいい難いものであった。インターネットが現在ほど高速化されていなかったこともあるが、Zoom や Teams などのソフトウエア利用は一般的なものではなかった。第二筆者は2018年（BC19にあたる）から１年間にわたりイギリスと日本をインターネットでつなぎ、計30回以上の授業を展開した経験を持つ。当時、Zoom や Teams は開発販売されていたかもしれないが一般教員が知るよしもなく、大人数とのコミュニケーション向けに開発されたわけではない Facetime（アップル社）や LINE を利用しながらの手探りの授業構築となった（若本、2019）。授業としては成功したものの、通信が途中で切れてしまうことも頻発し（2020年度の Zoom 授業でも同様であったが）、音声がコンピュータを通してハウリングしてしまい自分自身が発する声をスピーカーから少し遅れて聞きながら発話しなければならないなどの致命的な問題も頻発した（詳しくは、若本、2019）。その意味では、AC19となりつつある現在（実際にはまだ COVID-19 の渦中ではあるが）遠隔授業をするためのハードウエアもソフトウエアも充実しているといえる。

一方、2020年春学期、同志社女子大学においても全ての授業が遠隔授業となり、これまで PowerPoint すら触ったことのなかった教員もデジタル機器・ソフトウエアの利用を余儀なくされた。この様子は「史上最大の FD」（沖、2022）と評されることもある。これまで学内外で数多くの FD の研修会やワークショップを開催しても参加率が上がらず、また教員の教育のデジタル化に

ついても認識が遅々として向上しなかったことを考え合わせるならば、この新型コロナウイルス感染症は全てにおいて悪影響を与えたわけではなく、特に教育のデジタル化という面に関しては文部科学省のGIGAスクール構想が早期実現したことをもうひとつの例としても、映画 *Silver Linings Playbook*（2012）が指し示すような微かな光明もあったといえるかもしれない。

さて、このように自由自在に遠隔授業を操ることが可能になり新型コロナウイルス感染症の影響が弱まったことにより従来の対面授業も可能となった現在、高等教育機関である大学の語学の授業はどのような形態をとるべきなのであろうか。コロナの影響が低下したのだからBC19の対面授業に全面的に戻ろうという考え方も見受けられる。しかし、それではこの2020年からの３年間の教育界の苦闘の意味は何であったのかと自問せざるを得ない。莫大な時間と公私にわたる多額の設備投資によって大学ばかりでなく小学校から全てのレベルでほぼ全教員が遠隔授業「も」おこなうことができるスキルを向上させてきた。それらをかつて用済みとして教室の隅でひっそりと影を潜めることになったOHPのようにそれらを葬ってしまうのだろうか。それではこのコロナ禍のために失った志村けんや岡江久美子をはじめ多くの人命にも申し訳が立たないというものである。

本稿は、2020年度から2022年度までの３年間において、遠隔授業と対面授業両方を経験した大学生を調査参加者とし、学習者の立場から対面授業と遠隔授業の比較検討を試みるものである。

２．研究背景と課題の設定

２．１　定義

一概に遠隔授業と称するが、実際には多様な種類が存在する（金、森川、若本、2021）。分類のポイントとして、（１）教員と学生が出会う場所として対面であるかオンラインであるか、（２）情報のやり取りに関して同期型

（synchronous communication）であるかまたは非同期型（asynchronous communication）であるかという２軸を基準に大別することができる（図１）。

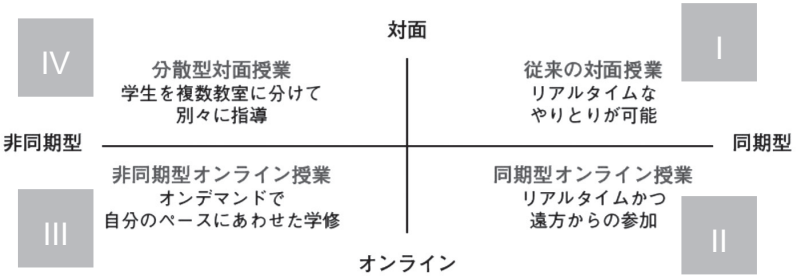

図１　多様な授業形態（杉森、2022をもとに筆者が改編）

本稿で議論するところの対面授業とは従来型の対面授業（図１の中でⅠが指し示すところ、以後、対面授業）であり、遠隔授業のうち、同期型オンライン授業とはZoomやTeamsによる遠隔授業を（以後、双方向オンライン授業）（Ⅱ）、非同期型オンライン授業とはビデオやPowerPointファイルをmanabaなどのLMS（Learning Management System）上に配置し学習者が自分のペースで学習するものを指すもの（以後、オンデマンド型授業）とする。分散型対面授業（Ⅳ）や対面授業とオンライン授業の混種（ハイブリッド型、ハイフレックス型）は新たな授業の型であり、今後の方向性として後に議論するものとする。

２．２　英語コミュニケーション能力と遠隔授業

英語コミュニケーション能力に関しては多様な定義が存在するが1980年に提唱された４要素モデル（Canale & Swain, 1980）およびその発展系として提唱されたBackmanモデル（Bachman, 1990）が研究者の共通認識と

いえる（若本他、2017）。ここで議論されるコミュニケーション能力は決してスピーキングやリスニングといったオーラルコミュニケーション能力だけでないことは明白であるが、日本においては特にこの側面に授業の焦点を当てようとしてきた（例えば、文部科学省学習指導要領、2018、2019）。これは日本人英語学習者が特にスピーキング能力に不全感を持ち英語を口頭で自由に操りたいという願望と軌を一にするものである。本稿はスキルの４つの側面またはCEFR（Council of Europe, 2020）で提唱されているような口頭・文書でのやり取り（interaction）の重要性を認識するものの、英語の授業に対し最も期待感の高いスピーキングの授業に焦点をあて議論をすすめることとする。

本論文の研究課題は次の２点にある。

研究課題（１）スピーキングにおける３つの授業形態（対面授業・オンデマンド型授業・双方向オンライン授業）に関し、大学生はどのような認識を持っているか。

研究課題（２）利点および問題点を踏まえ、スピーキングの授業にはどのような授業形態（対面授業・オンデマンド型授業・双方向オンライン授業）が適しているか。

３．研究方法

３．１　概略

スピーキング授業の形態に関する質問紙を作成し、関西の私立大学に通う37名の女性を対象に研究調査を実施した。

３．２　質問紙の開発と構成概念妥当性

質問紙の開発において、事前に妥当性・信頼性についての知見をもとに（Mackey & Gass, 2015）、構成概念の検討を行い、

１）スピーキングの学習効果（Part A）

2）双方向オンライン授業（Part B）
3）対面授業（Part C）
4）オンデマンド型授業（Part D）
5）理想のスピーキング授業（Part E）
6）個人の背景（学年、所属クラス、各授業形態の経験有無等、Part F）

の６項目を構成概念とし、全28項目の設問で設定した。

質問紙において、Part Aではスピーキングの授業内での学習活動として考えられる要素を基にペア・グループ活動の手軽さ、各形態における学習意識・嗜好を中心に計12問、セマンティック・デファレンシャル法（semantic differential scale、以下SD法）を用いて設けた。Part Bでは双方向オンライン授業に対して、Part Cでは対面授業に対して、Part Dではオンデマンド型授業に対して、利点・問題点を尋ねる問いをそれぞれ２問、多肢選択の多重回答方式を用いて含めた。Part Eにおいては学習者の好む理想的なスピーキング授業の形態を自由記述回答方式で尋ねた。Part Fでは参加者自身のバックグラウンド（１年次所属クラス、各授業形態の経験等）を中心に９問を設けた。質問紙は *Google Forms* 上で作成し、調査対象者にスマートフォンを通して回答ができるようQRコードを利用し、質問紙の配布を行った（Appendix参照）。

３．３　研究参加者

本研究の参加者は2020年４月大学入学の３年次生37名である。１年次の2020年度春学期は全面的に遠隔授業、その後は徐々に対面授業が取り入れられたため、参加者は両方の授業形態を経験している。調査に当たっては、研究趣旨を関西の私立女子大学の英語英文学科専攻の３年次生の所属する11クラスのゼミナール教員に説明・依頼し、2022年12月１日から31日までの間に調査を実施した。

３．４　手順

調査は *Google Forms* を利用し、研究倫理に十分に配慮を行い、授業外に調査を実施した。調査から得られた情報は個人情報の保護を徹底し、回答の内容や個人が特定されないことを説明した。また、調査の参加意思は参加者の意思に委ねられること、成績には一切関係がないことを十分に確認した上で質問紙への回答を依頼した。回答は10分程度で完了し、回答後はデータの研究利用に同意した者の回答を有効とした。その結果、37名全員から同意を得られた。結果分析にはSPSS Version 27.0を用いた。

４．結果と考察

４．１　信頼性

最初に、Cronbach's Alpha を利用して Part A（SD 法）の12項目に関し、質問紙の信頼性を算出し、質問紙として妥当な信頼性の高い数値を確保していることを確認した（表１）。その他のセクションは自由記述方式であるの信頼性分析からは除外した。

表１　信頼性（Cronbach's Alpha）

Cronbach's Alpha	N of Items
0.789	12

Note. $N=37$.

４．２　記述統計（SD 法データ）と Paired *t*-Test の結果

Part A は遠隔授業の中でも特に双方向オンライン授業に焦点をあて、授業の多様な観点について遠隔授業との対比をおこなう構成であった。まず Part 1 のスピーキングの学習効果の結果の分散を分析するために Boxplot

（箱ひげ図）を利用した（図２）。回答者が遠隔授業に効果を感じた程度が高いほど６に近づき、対面授業に効果を感じた度合いが高いほど１を示す。

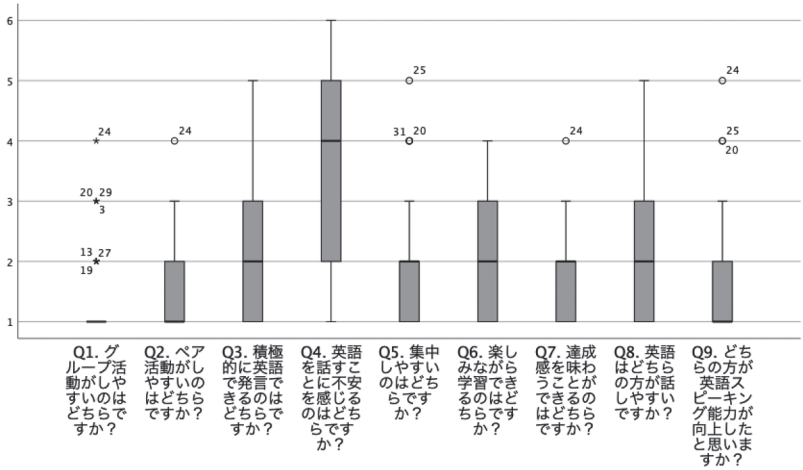

図２　Part A の Boxplot

図２が示すように、多くの外れ値（outlier）が存在するものの、全体としてスピーキング授業には対面授業が適しているとの回答傾向が強い。さらに具体的に SD 法の尺度を Likert Scale の２尺度に分解して分析すると、例えばＱ１（グループ活動がしやすいのはどちらですか？対面授業 vs 双方向オンライン授業）であればもともとのＱ１（双方向オンライン授業）はそのままの数値を用い、SPSS の「他の変数への値の再割り当て」機能を利用して、新たにＱ１ｂ（対面授業）の項目を「１→６、２→５、３→４、４→３、５→２、６→１」として設定した。数値が大きいほどその授業形態への支持が多いことを示す。その後、記述統計を算出し、データの正規性を前提に Paired *t*-Test を実行した（表２）。

表２　記述統計と Paired *t*-Test の結果

Questionnaire Items	Min.	Max.	*M*	*SD*	differences	*t*	*p*
Ｑ４．英語を話すことに不安を感じるのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	6	3.62	1.75	0.24	0.42	0.338
対面授業	1	6	3.38	1.75			
Ｑ８．英語はどちらの方が話しやすいですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	5	2.14	1.29	−2.73	−6.41	<.001
対面授業	2	6	4.86	1.29			
Ｑ３．積極的に英語で発言できるのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	5	2.08	1.21	−2.84	−7.13	<.001
対面授業	2	6	4.92	1.21			
Ｑ６．楽しみながら学習できるのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	4	2.05	0.91	−2.89	−9.65	<.001
対面授業	3	6	4.95	0.91			
Ｑ５．集中しやすいのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	5	1.92	1.06	−3.16	−9.03	<.001
対面授業	2	6	5.08	1.06			
Ｑ７．達成感を味わうことができるのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	4	1.78	0.82	−3.43	−12.71	<.001
対面授業	3	6	5.22	0.82			
Ｑ９．どちらの方が英語スピーキング能力が向上したと思いますか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	5	1.70	1.00	−3.95	−10.97	<.001
対面授業	2	6	5.30	1.00			
Ｑ２．ペア活動がしやすいのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	4	1.49	0.80	−4.03	−15.24	<.001
対面授業	3	6	5.51	0.80			
Ｑ１．グループ活動がしやすいのはどちらですか？							
リアルタイム・オンライン授業（Zoom・Teams）	1	4	1.38	0.76	−4.24	−17.02	<.001
対面授業	3	6	5.62	0.76			

Note. $N=37$.

表２は２つの授業形態の差分が最小から最大になるよう配置している。全体としてスピーキング授業には対面授業が適しているとの回答傾向が強い。具体的に検討を加えてみると、授業内でペアやグループで活動を行う際には対面授業が適していると考える参加者が有意に多い（Ｑ１、Ｑ２：$p<.001$）。つまり、学生同士の交流がおこなわれるペア・グループ活動に関しては対面授業の方が適していると研究参加者は認識している。スピーキング授業において重要視されている学生からの発言の容易さに関しても双方向オンライン

授業に対する支持もあるものの対面授業を好む参加者の方が有意に多い（Q３、Q８：$p<.001$）。集中のしやすさにおいても対面授業が有効であると回答する参加者が有意に多かった（Q５：$p<.001$）。

一方、スピーキング能力の伸張に関しては対面授業への支持が有意に多かったものの（Q９：$p<.001$）、英語を話すことへの不安に関しては２つの授業形態の間に有意差は確認できなかった（Q４：n.s.）。外国語学習不安（Foreign Language Anxiety）はスピーキング能力伸長およびその授業に影響を与える重要な要因である。後に議論したい。

４．３　授業形態比較の結果

Part A（Q10-12）では３つの授業形態をSD法で尋ねている。まず対面授業と双方向オンライン授業の比較の結果を示す（図３）。

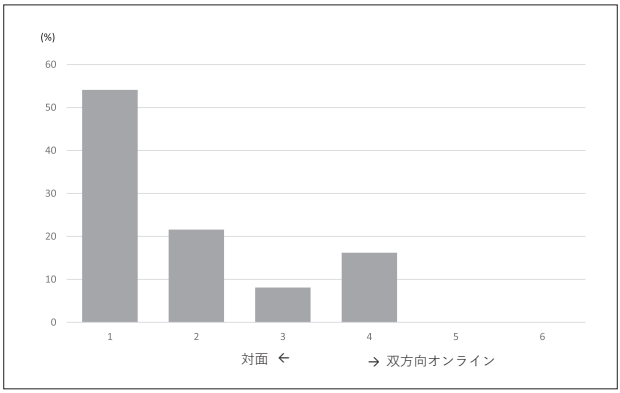

図３　対面授業と双方向オンライン授業の比較

過半数の参加者が（54.1%）対面授業を強く支持している。また、オンデマンド型授業との対比（図４）においても同数（54.1%）の参加者が対面授

業を強く支持しているが、双方向オンライン授業と比較してその支持は少ない（2.7%）。

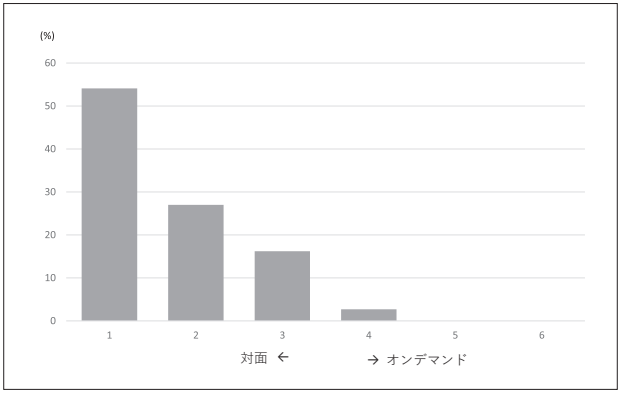

図４　対面授業とオンデマンド型授業の比較

一方、遠隔授業間の比較においては双方向オンライン授業の支持が上回っている（図５）。

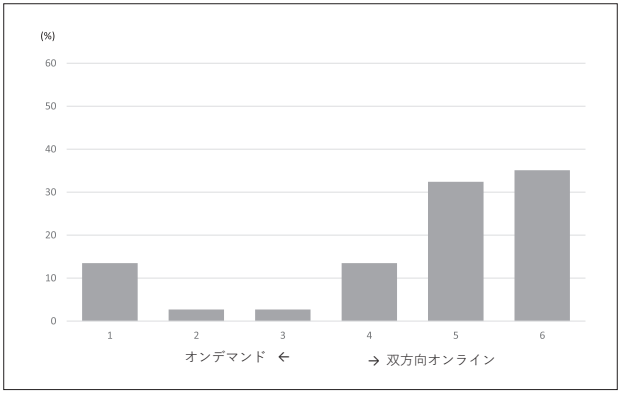

図５　オンデマンド型授業と双方向オンライン授業の比較

４．４　多肢選択データ・多重回答の結果

質問紙 Part B（Q13）では多重回答でリアルタイム・オンライン型の授業の利点を尋ねた（表３）。

表３　双方向オンライン授業の利点

Q13　双方向オンライン授業の利点	*n*	Percent 1	Percent 2
通学で疲れない	34	91.9%	11.8%
通学の時間が短縮できる	32	86.5%	11.1%
一般的に時間の余裕ができる	28	75.7%	9.7%
好きな場所で授業を受けられる	24	64.9%	8.3%
服装に気を配らなくてもよい	23	62.2%	8.0%
病気に感染するリスクが減る	23	62.2%	8.0%
遅刻の心配がない	18	48.7%	6.2%
化粧をしなくてもよい	17	45.9%	5.9%
分からない単語を辞書で調べることができる	16	43.2%	5.5%
緊張しない	13	35.1%	4.5%
話をしている相手の顔の表情がよく分かる	10	27.0%	3.5%

Note. $N=37$. Percent 1 は全参加者に対する、Percent 2 は全コメントに対する比率を示す。

表３が示す通り、37人中34人の参加者（91.9%）が肯定的に捉えていた共通の利点は通学で疲れないという点であった。学校に通わず、オンライン上で受けることができるということに多くの学生は最大の利点があると考えている。それゆえ通学が不要なために時間が短縮できること（86.5%）、遅刻の心配がないこと（48.7%）時間の余裕ができること、好きな場所で授業が受けられる（64.9%）など利便性に多くの長所を感じている。

その他、双方向オンライン授業の肯定的要素としては、分からない単語を辞書で調べることができること（43.2%）があげられていたが、緊張せず肩

の力を抜いて授業が受けられることに関する評価はそれほど高くない(35.1%)。また、画面越しなので、話をしている相手の顔の表情がよく分かることは双方向オンライン授業の重要な利点と想定されたが、参加者の実際の回答はそれほど多くない（27.0%）。対面授業では新型コロナウイルス感染症の影響でマスク越しのコミュニケーションとなっていた。マスクなしの画面越しの方が話をしている相手の顔の表情がよく分かるはずだと想定していたため、意外な回答結果であった。では次に双方向オンライン授業の問題点を検討してみよう。

質問紙 Part B（Q14）では双方向オンライン授業の困難な点を尋ねた（多重回答、表４）。

表４　双方向オンライン授業の問題点

Q14　双方向オンライン授業の問題点	*n*	Percent 1	Percent 2
ペア活動がしにくい	25	67.6%	8.7%
グループ活動がしにくい	25	67.6%	8.7%
授業に対する意欲の低下	20	54.1%	7.0%
インターネットの環境・接続が悪い	19	51.4%	6.6%
先生に質問がしにくい	16	43.2%	5.6%
集中しにくい	16	43.2%	5.6%
先生と一対一で話しにくい	15	40.5%	5.2%
相手の声が聞こえづらい	15	40.5%	5.2%
クラスメイトに親しみが持てない	15	40.5%	5.2%
クラスメイトに話しかけづらい	14	37.8%	4.9%
学生と同じ空間（教室）で受けられないこと	13	35.1%	4.5%
課題の量が多い	12	33.3%	4.2%
プレゼンテーションがしにくい	10	27.8%	3.5%
スピーキング能力が向上しない	10	27.8%	3.5%

Note. $N=37$. Percent 1 は全参加者に対する、Percent 2 は全コメントに対する比率を示す。

双方向オンライン授業の問題点としてペア・グループ活動が難しいとの回答が多く見られた（67.6%）。また過半数の参加者が授業意欲の低下につながることを指摘している（54.1%）。その理由として「集中しにくい」（43.2%）「クラスメートに親しみが持てない」（40.5%）「クラスメートに話しかけづらい」（37.8%）「学生と同じ空間（教室）で受けられないこと」（35.1%）などが明らかとなった。

一方、双方向オンライン授業であれば利点になると考えられる先生への質問のしやすさや先生と一対一で話すことは参加者には困難に映っていた（それぞれ43.2%、40.5%）のは意外である。これには「インターネットの環境・接続が悪い」（51.4%）も影響しているかもしれない。次に対面授業の利点

表５　対面授業の利点

Q15　対面授業の利点	*n*	Percent 1	Percent 2
ペア活動がしやすい	34	91.9%	11.0%
グループ活動がしやすい	33	89.2%	10.7%
授業を受けていると実感できる	23	63.9%	7.5%
クラスメイトに話しかけやすい	22	59.5%	7.1%
プレゼンテーションがしやすい	20	55.6%	6.5%
先生と一対一で話しやすい	20	55.6%	6.5%
先生に質問しやすい	20	55.6%	6.5%
集中しやすい	20	55.6%	6.5%
楽しい	19	52.8%	6.2%
話をしている相手の顔の表情が良く分かる	17	47.2%	5.5%
クラスメイトに親しみを感じることができる	17	47.2%	5.5%
英語スピーキング能力が向上する	15	41.7%	4.9%
話をしている相手のジェスチャーが良く分かる	14	37.8%	4.5%
相手の声が良く聞こえる	12	32.4%	3.9%

Note. $N=37$. Percent 1 は全参加者に対する、Percent 2 は全コメントに対する比率を示す。

と問題点について結果を概観してみたい。

Part C（Q15）では対面授業の利点を尋ねた（多重回答、表５）。表５が示す通り、ペア活動（91.9%）・グループ活動（89.2%）がしやすい、クラスメイトに話しかけやすい（59.5%）など、学生・教員間で交流がしやすい点に対面授業の利点があると参加者は考えている。話をしている相手のジェスチャーが良く分かる（37.8%）ことも利点に貢献しているかもしれない。一方、相手の声が良く聞こえる（32.4%）は双方向オンライン授業に一日の長があるように思われるだけに意外な結果である。

Part C（Q16）では対面授業の問題点を尋ねた（多重回答、表６）。

表６　対面授業の問題点

Q16　対面授業の問題点	*n*	Percent 1	Percent 2
通学で疲れる	31	83.8%	15.6%
遅刻の心配がある	27	73.0%	13.6%
通学に時間がかかる	26	70.3%	13.1%
服装に気を配る必要がある	24	64.9%	12.1%
化粧をしなければならない	23	62.2%	11.6%
一般的に時間の余裕がなくなる	19	51.4%	9.5%
病気に感染するリスクが高まる	18	48.6%	9.0%
緊張する	11	29.7%	5.5%

Note. $N=37$. Percent 1 は全参加者に対する、Percent 2 は全コメントに対する比率を示す。

指摘された問題点の多くは利便性に関わるものである。通学により疲れる（83.8%）、遅刻の心配（73.0%）、通学に時間が要する（70.3%）などが参加者にとって問題点と映ったようだ。内容に関しては緊張することを約１／３の参加者が挙げている（29.7%）。

Part D（Q17）ではオンデマンド型授業の利点を尋ねた（多重回答、表７）。

表７　オンデマンド型授業の利点

Q17　オンデマンド型授業の利点	*n*	Percent 1	Percent 2
通学に時間が短縮できる	34	91.9%	9.3%
通学で疲れない	32	86.5%	8.7%
遅刻の心配がない	32	86.5%	8.7%
好きな時間に学べる	29	78.3%	7.9%
繰り返し視聴できる	29	78.3%	7.9%
服装に気を配らなくてよい	28	75.7%	7.7%
化粧をしなくてもよい	28	75.7%	7.7%
好きな場所で授業が受けられる	28	75.7%	7.7%
一般的に時間の余裕ができる	24	64.9%	6.6%
メモが取りやすい	23	62.1%	6.3%
病気に感染するリスクが減る	22	59.5%	6.0%
席を外しやすい	19	51.4%	5.2%
緊張しない	12	32.4%	3.3%
分からない単語を辞書で調べることができる	10	27.8%	2.7%

Note. $N=37$.

双方向オンライン授業と同様に利便性をオンデマンド型授業の利点と考える参加者が多かった。また、好きな時間に学べる（78.3%）繰り返し視聴できる（78.3%）など柔軟に時間に余裕を持つことができる（64.9%）などオンデマンド型授業独自の特徴を指摘する参加者が多かった。このようにオンデマンド型授業では、学習者自身のペースで好きな場所・時間に授業が受けられるという点に価値が見いだされる傾向がある。

Part D（Q18）ではオンデマンド型授業の問題点を尋ねた（多重回答、表８）。

表８　オンデマンド型授業の問題点

Q18　オンデマンド型授業の問題点	*n*	Percent 1	Percent 2
ペアの活動がしにくい	18	48. 6%	8. 1%
集中しにくい	18	48. 6%	8. 1%
グループ活動がしにくい	16	43. 2%	7. 2%
授業に対する意欲の低下	14	37. 8%	6. 3%
プレゼンテーションがしにくい	13	35. 1%	5. 8%
先生に質問がしにくい	13	35. 1%	5. 8%
スピーキング能力が向上しない	13	35. 1%	5. 8%
楽しみがない	12	32. 4%	5. 4%
達成感が得られない	12	32. 4%	5. 4%
先生と一対一で話しにくい	11	29. 7%	4. 9%
満足感が得られない	11	29. 7%	4. 9%
課題の量が多い	11	29. 7%	4. 9%
インターネットの環境・接続が悪い	10	27. 8%	4. 5%
学生と同じ空間（教室）で受けられないこと	10	27. 8%	4. 5%
クラスメイトに親しみを持てない	10	27. 8%	4. 5%

Note. $N = 37$.

双方向オンライン授業との類似点として、学生や教員との交流や活動がしづらいという点があげられていたが、楽しみがない（32. 4%）達成感が得られない（32. 4%）満足感が得られない（29. 7%）課題の量が多い（29. 7%）という点はオンデマンド型授業独自の問題点のようである。

４．５　自由記述形式の質問分析

Part E（Q19）では、大学１年生の授業を想定し、その形態という観点から参加者の考える理想のスピーキング授業について記述するよう求めた。記述自体は授業形態の好みに関する抽象的なコメントが多く見受けられたが、

大学生が考える英語スピーキング授業の理想の姿が浮かび上がってくる（表９）。

表９　理想の英語スピーキング授業

分類カテゴリー	代表的なコメント
話す機会	・オンライン授業だと一言も話さない人もなかにはいるので、スピーキングは対面での方がよい思う。
失敗の許容	・失敗されても許容される温かい空気感がある対面授業。
インターラクション	・プレゼン中心ではなく、様々なトピックで色々な人と会話できること。 ・先生対生徒の一方通行ではなく、グループでお互いにコミュニケーションを取る。 ・自分から対話をする機会が多く、先生と話す機会が多い授業。
グループ・ペアワーク	・対面でのグループディスカッション。 ・対面でグループワークを行う。 ・対面でたくさんグループワークを英語ですること。 ・ペアワーク。
フィードバック	・先生からその都度指摘を受け、フィードバックがもらえる。 ・先生に発音をしっかり確認してもらえる対面授業 ・毎授業テーマを決めて先生がテーマに関することをプレゼンまたはスピーチをして、生徒が質問や感想を述べる。その後、テーマに関する自分の意見をクラス内で交流し、発表する。先生からフィードバックをしてもらう。

表９が示すように、コース受講生全員が必ず話すというルールを持つこと（話す機会）またその中で受講生間や教員との間に英語でのやり取りがあること（インターラクション）が重要であると参加者の大学生は考えている。

その話す機会は多い方がよく、コース参加者同士のグループワークやペアワークとして実現される（グループワーク・ペアワーク）。一方、英語を話すことに対する不安感が軽減されること（失敗の許容）や話した内容や発音について教員からの指導があること（フィードバック）も重要と考えている。スピーキングの授業においてはBC19の段階においても反転授業を活用した試みは多くなされてきている。例えば、スモールトークを授業外で練習し授業内でグループの中でシェアをすることにより、英語スピーキング能力に向上が見られた例（大塚他、2022）が報告されている。実際的には、表９の特徴を念頭に、反転授業から一歩進んで遠隔授業（双方向オンライン授業・オンデマンド型授業）と対面型授業の融合を図ることが現実的な選択となるかもしれない。

４．６　研究課題１への回答

研究課題（１）スピーキングの３つの授業形態に関し、大学生はどのような認識を持っているか。

対面授業と遠隔授業を比較することで、それぞれに独自の利点と問題点あり、両者はゼロサムではないということが明らかになった。遠隔授業においては、学生同士や教師との深い交流や活動の機会が得られにくい。スピーキング授業における効果では、多くの学生が授業内でペア・グループ活動をするには対面授業が適しているという結果を示した（表３）。双方向オンライン授業の問題点においても同様に、過半数以上の学生がペア・グループ活動の難しさを挙げていた（表４）。自由記述形式の項目では多くの学生が理想のスピーキング授業として、積極的なグループ・ペアワークの活動や会話中心の授業を望んでいることが示唆された。

以上の結果から、遠隔授業は教師が一方的に授業を行う形態になりやすく、会話中心の授業を展開することが困難である可能性がある。また、自由記述形式の回答から、遠隔授業では一言も話さない学生が存在することが指摘さ

れた。遠隔授業においては発言しないという状況が生じやすいため、スピーキング授業を遠隔授業で行う際は会話中心の授業を展開するための特別な工夫が教員に必要であると考える。

対面授業においては、ペア・グループ活動を通じて積極的なコミュニケーション活動が促進されるため、話すことが必要不可欠な状況が生まれ、話す意欲が高まる傾向が見られることがうかがえた。対面授業の利点では、半数以上の学生がペア・グループ活動のしやすさを挙げている（表５）。また、自由記述形式の回答からは理想のスピーキング授業において、対面授業が圧倒的支持を得ており、授業形態として発言のしやすい環境が整っていることが読み取れる。

一方で、対面授業の問題点として、半数の学生は緊張することを指摘し（表８）、毎回の授業で通学しなければならないことに不便さを感じていると過半数以上の学生が回答している。このような心理面での不安は積極的に英語を話そうとする意欲（willingness to communicate）の低下につながる可能性がある。したがって、遠隔授業と対面授業を融合することで、学生にとってより満足感の高いスピーキング授業を作り、結果的に話す意欲を高めることができることが期待される。以上のことから、遠隔授業においては会話中心の授業が十分に行われていないために、学生や教師とのコミュニケーション活動が行われるよう、改善が必要であることが示唆された。

一方で、対面授業では学生の理想とするペア・グループ活動が積極的に行われていることから、発言する機会が増え、話す意欲につながっていることが示された。しかしながら、通学時間に対する不便さや毎回の授業に緊張感を持ち望むことへの不満を持つ学生が多く、話す意欲の低下につながることが示唆された。

学生の考える理想のスピーキング授業（表９）において、ペア・グループ活動を通して、話す意欲を高めたいと考えている学生が多いことから、授業形態に応じて、会話が積極的に行われるよう、授業内容を考慮する必要があ

ることがうかがえた。

４．７　研究課題２への回答

研究課題（２）利点および問題点を踏まえ、スピーキングの授業にはどのような授業形態が適しているか。

各授業形態において、学習者が異なる不安を抱いていることが推測された（図１のモデル）。興味深いのは双方向オンライン授業において不安が軽減されると期待されていたものの、対面授業と有意差がないことである（表２）。外国語学習不安については近年多くの研究の集積がなされているが、スピーキングについての不安は英語自体を話すことの不安と教室で英語を話すことの不安の２種類存在する（Masutani, 2022）。今回の調査はこの点について詳細に調査をしていないが、教室で他のクラスメイトの目を気にしながら英語を話す不安は英語能力が向上しても解消しない（Masutani, 2022）。これは日本独自の集産主義文化（Collectivism、Hofstede, Hofstede, & Minkov, 2010）の教室への投影であると考えられる。今後、双方向オンライン授業と対面授業のどちらが不安軽減に効果があるのかを探求してみることにより、学習者により適した学習形態を提供することができるであろう。

また、スピーキング授業の形態においては、授業内で積極的に話せる環境が整っているか、または達成感を味わえる授業内容であるかが好みの選択に影響することが示唆されている（表４、５、８）。また、自由記述形式の回答からは、スピーキングの授業とはいえども、学習者自身の話す機会は限られていることが推測された。これに対して「様々なトピックを生徒や教師と会話できること」（表９）と一部の学生が回答したように、授業内で幅広い話題を提供することや、学生の興味をそそるテーマを扱うことが英語を話す抵抗感を下げる要因のひとつとなると考える。これらの結果から、授業内で積極的に英語を話すことができる環境を整備するために、教員には幅広い話題を提供し、学生の興味を持つテーマを扱うといった改善が必要であること

が示唆された。さらに、学生自身の英語能力に対する自信や改善点が明確になるよう、個人的フィードバックを受ける機会を提供することも重要である。理想のスピーキング授業（表９）において、一部の回答者は個人的フィードバックを受ける機会を望んでいた。個人的なフィードバックを受けられる機会が限られていると学習者自身の英語能力に対する自信や改善点が明確にならず、逆に抵抗感を高めるきっかけになる。

また、各授業形態において、異なる学習効果があることが示された。したがって、学習者のスピーキング授業の満足度と話す意欲を高めるために、それぞれの授業形態の利点を統合し最適な授業形態を作り出すことが期待される。質問紙の結果分析から、対面授業はグループ・ペアワーク活動が展開しやすい環境であることが示唆された（表５）。しかしながら、スピーキング授業では学習者自身が話す機会は限られており、話す話題も限定されているため、会話中心の授業が展開されにくいことが現状である。

したがって、対面授業においての課題はグループ・ペアワーク活動を活かし、興味深い様々なトピックを扱いながら、学生同士や教師とのコミュニケーションの機会を増やすことである。一方で、遠隔授業の利点として、通学せずに学習者の好む場所で授業を受けられることであると示された（表３）。しかし、遠隔授業の問題点において、ペア・グループ活動といった学生や教師との交流や話す機会を作るのが困難であることが示唆され、教師の一方的な授業になる傾向があることが示された（表４）。このような結果から、遠隔授業では学習者一人一人が積極的に発言することが困難であるため、グループではなく会話中心のペア活動に特化した授業を作ることで、学生同士の活動が可能になるのではないだろうか。授業内容においては毎回異なる学生と、ブレイクアウトルーム（Zoom）など個別のルームに分かれ、異なる話題について、英語で会話をする。教師は学生の補助や学生同士が話しやすい環境を作り、フィードバックを与えることによって、学習者のスピーキング能力を伸ばすことができると期待される。

このように、対面授業と遠隔授業の双方の利点が示され、両者を組み合わせることでより効果的なスピーキングの学習が可能であることが示唆された。具体的には授業15回分のうち、８回分は対面授業、７回分は遠隔授業で行い、学習者同士や教師との交流を深めながら、各学習者が発言しやすく、満足感を得られる新たなスピーキング授業の形態を作ることができると考えられる。また、英語能力が十分発達している学習者には教室文化の影響を受けずにさらに英語能力を伸ばすために双方向オンライン授業が適している場合もあるかもしれない。そして、初期段階にある学習者には多様な学習方略を直接教員や他の受講生から学ぶために対面授業が向いている可能性も考えられる。または、対面授業とオンライン授業の混種（ハイフレックス型、Hybrid Flexibility）や分散型対面授業といったひとつのコースの中に複数の授業形態を混在させる方法も有望であるかもしれない（杉森、2022）。

５．結論と研究の限界

５．１　結論

今回、スピーキング授業の形態における学習効果や各授業形態の利点・問題点を調査し、以下の４点が明らかになった。

１）本研究では、各授業形態における学習効果の比較を行った。その結果、対面授業の利点においては積極的にペア・グループ活動が行われ、コミュニケーション活動が促進されることが明らかになった。一方、遠隔授業の問題点においては学生同士や教師との交流が不足しているため、会話中心の授業は十分に展開されず、一方的な授業になりやすい傾向があることが示唆された。

２）遠隔授業の利点において、多数の回答者は通学しなくても好きな場所で授業を受けることができるという点に好感を持っていることが明らかになった。対面授業に対する不満としては、通学時間にかかる疲れや遅刻の心配が挙げられた。また、対面授業では緊張感を持って受けなければならないこと

に不安を感じている学生も多く見受けられた。

3）学習者の理想のスピーキング授業について分析した結果、授業形態の好みは積極的な英語スピーキングの機会が提供されるかどうか、また達成感を味わえる授業が提供されているか、スピーキング不安が低いかどうかの3項目に影響を受けることが示唆された。この結果は、学習者が積極的に英語を話す環境にいること、そして授業の成果を実感できることが学習効果に直結することを意味している。言い換えれば、理想のスピーキング授業は、学習者が積極的に授業に参加し、英語スピーキングの機会が豊富で、不安を感じることなく、同時に達成感を味わえる授業である必要があると言える。

4）自由記述形式の質問項目分析から、多くの学生が対面授業を支持しており、少人数クラスを希望する回答者も多く見受けられた。この結果から、スピーキング授業においては、学習者が教師と学生との距離が近く、自由に発言しやすい環境を重要視していることが示唆された。また、授業内ではグループ・ペアワークを通じた活動を希望する回答者が多く、各生徒が積極的に発言をすることの重要性を意識していることが考えられた。これらの結果は、対面授業が学習者にとって効果的なスピーキング環境であることを示唆している。一方で、多くの学習者は個人的なフィードバックを受け取ることのできる授業を希望しており、その中には発音やプレゼンテーションに関する個人的な評価や周囲からのフィードバックを求める学生も見受けられた。このような学習者は、自分自身のスキルアップに向けて、より具体的なアドバイスや指導を必要としていることが示唆された。教師側は個人的なフィードバックを受け取ることのできる環境を提供することで、学習者のモチベーションや学習効果の向上に繋がると考える。

5．2　研究の限界

本調査において、3年次ゼミナール教員に依頼し、*Google Forms* での調査を行ったが、回答は各学生の自主性に委ねられていたために、目標回答人

数よりも下回る回答数となった。また本研究において、対面授業と遠隔授業の両者を経験した学生は少なく、３年次の女子大学生の37名を対象に限定的調査を行ったため、今後は対象人数を増やし、学年を拡大し、研究分析と考察を行う必要がある。また、他大学の英語英文学科とのスピーキング授業の比較を行うことが今後の研究においての課題である。この調査では、記述形式の問題が大半であり、自由記述形式の質問は１問のみであったため、学習者個人のスピーキング授業における意見を十分に聞き取ることができなかった。今後の研究では、より詳細な自由記述形式やインタビューに基づき、学習者のスピーキング授業における考えや問題点を明らかにし、学習者の意見をより明確に示す必要がある。これにより、より正確な結論を得て、今後のスピーキング授業の改善につながることが期待される。

６．教育への応用

本研究の結果、遠隔授業および対面授業両方の形態を体験した大学生はスピーキングの授業に関し対面授業への強い嗜好を示している。しかし、このことをもってスピーキングの授業には対面授業が最適であるというのは早計である。第一に2020年度の遠隔授業は事前に計画され用意周到に準備されて実施されたわけではなく、やむにやまれぬ状況下で実施されたことを念頭におかねばならない。多重回答においても遠隔授業の問題点としてネットワークの不安定さをあげる参加者が多かったが、当時、例えば双方向オンライン授業を想定したネットワークの構築はなされておらず条件整備として非常に脆弱であったことは否めない。また、第二筆者も含め、初めて Zoom を使う教員も多く、オンデマンド型授業にしても授業ビデオ作成の知識も技能も未熟な状態であったことは事実である。遠隔授業と対面授業を比較することは初心者のアマチュア選手を百戦錬磨のプロ選手と戦わせるようなものなのかもしれない。

英語に “Don’t throw the baby out with the bathwater”（風呂桶の

お湯と一緒に赤子を流してしまうな）という諺がある。ここでいうところの“the baby”とは双方向オンライン授業やオンデマンド型授業の遠隔授業そのものであり教員が獲得したその知識と技能である。最も危惧されるのは安易に対面授業への回帰であり、必要性が低下したからといって大学当局が予算面からZoomなどへの設備投資を中止することである。

人文社会系の学生にとって、ICTやAI（Chat GPTなど）が進化しつつある現状であるからこそ、英語のコミュニケーション能力はよりその重要性を増す。これは逆説的であるが、空間を超越した全世界的規模のコミュニケーションがいっそう容易になるからであり、また同時に機械に依存しない人と人との直接の交流の重要性が高まるからである。今後、「ネイティブライクな」といった古典的な英語教育（ELT）ではなく、世界で圧倒的多数を占めるノンネイティブスピーカーの人々と英語でコミュニケーションする「国際語としての英語」（English as a Global Lingua Franca, Galloway & Rose, 2017）の重要性は対面・オンラインなど多様な形態でのコミュニケーションを通してより高まるであろう。英語教育の最終目的は、過去の遺物となりつつある欧米の模倣ではない。大学卒業後、ダイナミックに展開される21世紀の世界では、国際語としての英語スキルが益々必要とされるに違いない。その意味では、日本の英語学習者に必要とされるスピーキングの授業形態を検討することは、大切なマイルストーンとなるであろう。

参考文献

Bachman, L. F. (1990). *Fundamental considerations in language testing.* Oxford University Press.

Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics, 1*, 1-47.

Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: learning, teaching, assessment* (Companion volume ed.).

https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4

Galloway, N., & Rose, H. (2017). Incorporating Global Englishes into the ELT classroom. *ELT Journal, 72*(1), 3-14. https://doi.org/10.1093/elt/ccx010

Hofstede, G. H., Hofstede, G. J., & Minkov, M. (2010). *Cultures and organizations: Software of the mind* (3rd ed.). McGraw-Hill.

金衿佳、森川慧子、若本夏美．(2021)．「遠隔授業と対面授業、その課題と可能性：コロナ禍から新しい学びへ」*Asphodel*、*56*、77-107.

Mackey, A., & Gass, S. M. (2015). *Second language research: Methodology and design* (Second ed.). Routledge.

Masutani, Y. (2023). *Perspectives and strategies related to foreign language anxiety in the classroom: How can learners and teachers alleviate FLA in Japan?* Unpublished doctoral thesis submitted to Doshisha Women's College of Liberal Arts.

文部科学省．(2018)『中学校学習指導要領』.

文部科学省．(2019)『高等学校学習指導要領』.

沖裕貴．(2022)．編集後記.『教育情報研究』38-1.

大塚朝美、今井由美子、若本夏美．(2022)．「反転学習によるスモールトークを活用したスピーキング力向上を目指す指導法」『関西英語教育学会紀要』*45*. 77-94

Russell, D. O. (2012). *Silver linings playbook* [Film]. The Weinstein Company.

杉森公一．(2022. 10. 31)．「教えるを学ぶエッセンス　第７回　ハイフレックス型授業で対面／オンラインを『混ぜる』」『週刊医学界新聞（看護号）』第 *3491* 号. https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2022/3491_05

若本夏美、今井由美子、大塚朝美、杉森直樹．(2017)．『国際語しての英語：進化する英語科教育法』松柏社.

若本夏美.(2019).「i-Seminar の可能性：インターネット利用ゼミ１年間の記録」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』*36*、212-225.

注：この研究成果の一部は第二筆者に対する研究奨励金（同志社女子大学、2022年）によるものである。

Appendix 質問紙の概略

No.	質問のカテゴリー	質問内容
Q 1	スピーキングの学習効果	グループ活動のしやすさ
Q 2	スピーキングの学習効果	ペア活動のしやすさ
Q 3	スピーキングの学習効果	積極的に英語で発言すること
Q 4	スピーキングの学習効果	英語を話すことへの不安
Q 5	スピーキングの学習効果	集中のしやすさ
Q 6	スピーキングの学習効果	楽しみながら学習すること
Q 7	スピーキングの学習効果	達成感が得られる
Q 8	スピーキングの学習効果	英語が話しやすい
Q 9	スピーキングの学習効果	英語のスピーキング能力の向上
Q10	スピーキングの学習効果	学習形態の好み
Q11	スピーキングの学習効果	学習形態の好み
Q12	スピーキングの学習効果	学習形態の好み
Q13	双方向オンライン授業	利点
Q14	双方向オンライン授業	欠点
Q15	対面授業	利点
Q16	対面授業	欠点
Q17	オンデマンド型授業	利点
Q18	オンデマンド型授業	欠点
Q19	理想のスピーキング授業	学習者が考える理想のスピーキング授業
Q20	学習者の背景	１年次の所属クラス
Q21	学習者の背景	スピーキング授業における遠隔授業の経験
Q22	学習者の背景	スピーキング授業における遠隔授業の経験
Q23	学習者の背景	スピーキング授業における遠隔授業の経験
Q24	学習者の背景	スピーキング授業における遠隔授業の経験
Q25	学習者の背景	現在の学年
Q26	学習者の背景	所属ゼミ
Q27	学習者の背景	協力者の名前（イニシャル）
Q28	学習者の背景	学科・大学